

	まれす えまにゅえる
氏 名	MARES Emmanuel
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 4 0 7 号
学位授与の日付	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研究科・専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	縁側の近代化—夏目漱石の作品を通して—
審 査 委 員	(主査)教授 日向 進 教授 竹内次男 教授 石田潤一郎 教授 伊藤 徹

論文内容の要旨

本論文は、日本建築に固有の空間とされる縁側(縁)が、明治から大正という近代社会において、どのような空間として体験され意識された(「生きられた」)のかということを、夏目漱石の文学作品を読み解くことによって明らかにすることを目的としている。序章では、縁側の建築的構造について分析し、舞台となる近代の住宅建築の形式を縁側のあり方に注目しつつ整理している。また、漱石の作品を素材とすることの位置づけを行ったのち、以下のように本論は構成されている。

第一章 原典の紹介—漱石作品『門』にあらわれる家をめぐる考察

文学的空間として、縁側が『門』の構造に大きな影響を与えていていることを、既往研究の批判を通してまず確認している。そして、漱石の作品は、創作でありながら恣意的解釈を許さないものであり、本研究の素材として有効であることが論じられている。

第二章 近代の生きられた縁側

『門』を主な素材として、縁側の日常的な体験について考察している。『門』の舞台となる家は、東京山の手の借家であるが、それは江戸時代における中・下級武家住宅の様式を継承したものであり、基本的に前近代のあり方を継承した様式であった。前近代における縁側は、空間概念としては「うち(私)」と「そと(公)」の接点としての場所であり、開放的である。しかし、近代の東京において、緊張を抱えながら社会と隔離されて暮らす人たちにとって、縁側は「うち」という保護された空間となる。社会に対しては閉じた、空間としての私性をもつことによって、縁側がやすらぎの場となっていく。

第三章 ガラスと椅子の導入

『門』『硝子戸の中』『三四郎』『草枕』などを素材として、椅子とガラスが縁側の性格にどのような変化を生起させたのか、ということが論じられている。

移動可能な家具である椅子は、縁側の形態に改革的な影響は及ぼさなかった。しかし、ユカ座から椅子座へという近代的な要求を象徴し、室内の調度という性格が強い椅子を縁側に持ち出すことによって、縁側がもつ「うち」としての性格を強める役割を果たす。

一方、ガラスは縁側の本質を直接的に変容させる。内外境の建具に透過性をもつガラスが採用されること、「そと」に対して開放的であるという縁側の構造上の弱点を補うことになる。「うち」と「そと」との境界が明確になったことにより、縁側は開放性、柔軟性を失い、より「うち」としての空間に変容していく。

論文審査の結果の要旨

外部でも内部でもない曖昧な空間である縁側(縁)をもつことによって、日本建築の空間は魅力的に組み立てられてきた。「うち」であり「そと」であるという両義的な性格をもつ縁側は、外国语に翻訳することが容易でない、日本建築に固有な空間概念である。

申請者は、近代という時代の転換期に、縁側がどのように体験され意識されていたのかということを、漱石の文学を通して明らかにすることにより、前近代を象徴する空間が、近代という時間の経過のなかでどのように変容し、変質していくのかということについて考究した。そして、個と社会との関係性を、日本の家屋にとって伝統的で象徴的な縁側という空間の使われ方を分析することによって明らかにしようとする。

近代都市の新たな住人の生活の場として提供されたのは、封建制を多分に継承した建築であった。そして、社会との隔離をもとめた彼らがやすらぎを感じる場は縁側であった。このとき、人と人、人と社会との接点であった縁側の公的性質は失われ、室内と等質の私的空间として体験され、意識されていることが明らかになる。

さらに、近代に導入されたガラスと椅子が、縁側が「うち」としての性格、いいかえれば空間としての「私性」のみを帯びていき、結局、以後の日本の家屋から縁側が切り捨てられていく、という推論を組み立てている。

申請者の研究は、人類学や民俗学的な視点も重ねることにより、歴史的な文脈のなかに縁側を位置づける試みということができる。それは従来の日本建築史や空間論研究では欠落していた作業である。

現代の都市空間において、建築と社会との好ましい関係のあり方がもとめられるなかで、本来の縁側的な空間を構築することの再評価がもとめられている。縁側という空間の特質を解明しようとする申請者の研究成果は、人と社会との関係を含む、良質で快適な生活空間の創出に対する一つの指針としての役割が期待される。

本論文は、フランス極東学院研究論文集に審査を経て掲載が決定した2編の論文(仏語)をもとに、日本語で書き改められた。

- Mares Emmanuel, *Une expérience de l'ère Meiji, à travers « La porte » de Natsume Sôseki, première partie*, in Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient, 2006年5月(予定)、通巻93号
- Mares Emmanuel, *Une expérience de l'ère Meiji, à travers « La porte » de Natsume Sôseki, deuxième partie*, in Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient, 2007年(予定)、通巻94号

参考論文

- ・マレス・エマニュエル:「『門』にあらわれる縁側の空間について」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』pp.1041-1044、2004年6月